OZU
AGURUBITO
3.
松尾 佳治
MATSUO YOSHIHARU

AGURUBITO's Story!

農業と無縁だった妻と自分たちらしい農業経営へ

OZU AGURUBITO No 3. **松尾 佳治**

年齢／37 歳　主なエリア／若宮・八多喜
主な作目／イチゴ、ミニトマト、トウモロコシ、タマネギ、キウイフルーツ

「結婚」「Uターン就農」を経て、「妻と自分たちらしい農業経営」へ

1. 結婚を機に U ターン

代々農家の私は、SE（システムエンジニア）として愛知県で働いていましたが、定年後に帰ってきても人間関係も築けれないと思ったこと、地元では SE の仕事がないことから、結婚を機に就農をすることに決め、妻と大洲に移住しました。

2. 夫のみ就農

父から教えてもらいながら、これまでの農業を真似していきました。妻は他産業で働き始めました。

3. 妻が手伝いを開始

元々野菜がアレルギーなどで食べることが苦手だった妻は、大洲の新鮮な野菜を食べてその美味しさに感動したそうです。例えそれが規格外で捨てられていたものだとしても。それから農作業を手伝うようになりました。

AGURUBITO's Story!

4. 妻が外モノ目線での疑問を抱く

これまで農家とは無縁だった妻から見れば、農家は「作り」にはこだわるが「売り先」にはあまりこだわらない。そのように感じたそうです。

5. 妻が農業経営に興味を抱く

疑問が大きくなり、農業経営とはどういうものなのか興味を持ち始めました。

6. 妻が農業大学校に入校

興味から行動へ。基礎的な農業経営や栽培方法を学ぶため、愛媛県立農業大学校に毎週通い始めました。

7. 妻が様々な研修や講義を受講し刺激を受ける

県や市が実施する研修・講義（POP の作り方・加工品・食品衛生など）を受けました。その中で、多くの人に出会い、刺激を受けます。

8. 妻が専門的な講座にステップアップ

より専門的な農業経営高度化塾を 1 年間受け、自身の経営計画も作成しました。

9. 妻が「夢」を語る

農業を職業の選択肢の一つにしたい。これが移住・就農・農業経営の勉強を重ね、導き出した一つの夢。これまでは農家が農家の後継ぎとして農業をすることが多かったのではないか。これからの子どもたちにとって、農家ではない人でも農業を職業として選べるような社会にするためには自分たちは何をすべきか。そう考えるようになったのです。

「ぷらいまりぃ」
WEB SHOP はこちらから▸▸

10. 妻が「ぷらいまりぃ」を仲間と設立

夢の実現のため、新たな一歩を踏み出すこととなりました。内子・大洲の同じような想いを持つ女性農業者 5 名で「ぷらいまりぃ」を立ち上げ、野菜セットのネット販売やマルシェでの販売を始めました。

11. 妻に感化され、自分たちらしい農業へ

妻の行動、考えに感化され、私も栽培だけでなく、経営について興味を持ち始めました。
農業には様々な手法があります。同じ品目を大量に栽培して、同じ売り先に販売する農業。少量多品目を個人販売する農業。農業法人に就職して栽培する農業。
その中でも妻が大洲の野菜を食べた感動から、自ら育て、自ら販売先を築き販売する方法が自分たちらしい農業だと考え、日々目指しながら農業と向き合っています。完熟してからの収穫とお客様のニーズに応えられるよう幅広い品目の栽培にこだわり、市内のスーパー（愛たい菜、マルナカ大洲店）や青果店に販売しています。